

# ぜんたい

令和7年 4月  
第76号



上段：墓ノ木つかみどり大会(黒部川内水面漁協)／アユ発眼卵(庄川漁連)／モクスガニ(小矢部川漁協)  
下段：神通川友釣り・熊野川サクラマス放流(富山漁協)

## CONTENTS

巻頭言	2	魚嫌いだっ私	20
全内漁連開催の各会議について		新任のごあいさつ	21
総務委員会を開催	4	我が漁協(栃木県 那賀川南部漁協)	22
ブロック会議・推薦委員選出協議会を開催	4	気になる研究結果(国研 水産研究・教育機構水産技術研究所)	24
みんなでやるぞ内水面事業の現地調査・総合評価検討委員会		内水面漁協(第46回)	26
ならびに事業報告会を開催	5	愛しきアユ(第49回)	27
第1回種苗対策委員会を開催	7	日光支所から	28
第18回内水面漁業の施策に関する意見交換会を開催	8	全国内水面漁連の新年度事務体制について	29
令和6年度補助事業の実施結果報告	14	業務日誌	30
令和6年度委託事業の実施結果報告	16	職員のつぶやき	31
内水面漁業振興議員連盟 総会	18	新聞記事から	31
ワカサギふ化施設導入に関する支援制度のご案内	19	編集後記	31

全国内水面漁業協同組合連合会

## 刊行物案内

本会では、漁場環境の改善に係る水産庁の委託事業を受託しています。事業終了後にその結果を、報告書として取りまとめ、漁業関係者ほか多方面に実費負担で提供しています。ご希望の方はこちらの申込方法をご覧ください。在庫がなくなり次第、終了とさせていただきます。  
※価格には送料・消費税10%が含まれています。

タイトル	監修・編集	発行	価格	在庫
アユ種苗の放流の現状と課題 —琵琶湖産、人工産、海産の特性を考慮した増殖事業—	監修 農学博士 石田 力三	H14.3	2,100	
魚取水施設に迷入させないための試み —内水面資源利用向上対策事業報告書—	監修 愛媛大学名誉教授 水野 信彦	H13.3	1,570	
天然アユを川にたくさん遡上させるための手引き —海産アユ種苗回帰率向上総合調査報告書—	監修 東京大学名誉教授 羽生 功	H12.6	2,620	
「身近な川と魚の調べ方」を用いた調査と さかなに配慮した河川工事事例 —都市近郊河川漁場改善調査報告書—	監修 広島大学名誉教授 中村 中六 東京大学名誉教授 平野 礼次郎	H8.3	2,410	
魚の迷入の実態とその対策へのアプローチ —放流稚魚等迷入防止対策事業報告書—	監修 水産環境研究所代表 石田 力三	H8.3	2,940	少
農業水利施設の魚道整備の手引き	編者 農業水利施設魚道整備検討委員会	H6.3	2,100	少
汽水域資源の有効利用をめざして —汽水域総合開発利用調査報告書—	監修 東京大学名誉教授 日比谷 京	H6.3	1,890	
ブラックバスとブルーギルのすべて —外来魚対策検討委託事業報告書—	監修 東京大学名誉教授 羽生 功	H4.3	3,150	少
魚を育む豊かな流れ —河川生物資源保全流量調査報告書—	監修 東京大学名誉教授 日比谷 京	H1.3	2,410	少

### 【申込方法】

お申し込みは、申込書をHP上でダウンロードして印刷し、必要事項をご記入の上、FAX、郵送または電子メールにてお送りください。お支払いは、現金書留、または銀行振込にて先払いをお願いしています。入金が確認出来次第、お届けいたします。

### ●郵便の場合

現金と申込書を同封の上、現金書留にて本会事務局までお申し込みください。

### ●銀行振込の場合

申込書をファックスまたはお電話、電子メールにてお届けください。折り返し振込先をお伝えします。

### 【申し込み先】

#### 全国内水面漁業協同組合連合会

〒101-0044  
東京都千代田区鍛冶町1丁目10-4  
丸石ビル4階  
TEL: 03-6260-9595  
FAX: 03-5296-2030  
E-mail: zennaigyoren@naisuimen.or.jp

機関誌 ぜんたい 第76号

#### 全国内水面漁業協同組合連合会機関誌

令和7年4月発行

発行人：全国内水面漁業協同組合連合会  
代表理事長 谷 公一

編集：本所 機関誌編集委員会

発行所：全国内水面漁業協同組合連合会  
〒101-0044  
東京都千代田区鍛冶町1丁目10番4号 丸石ビル4階  
TEL：03-6260-9595 FAX：03-5296-2030  
ホームページ：https://www.naisuimen.or.jp

印刷：鵜川印刷株式会社  
〒923-0053 石川県小松市河田町丁33番地



者の満足は高く、今後、漁協による収益活動の一環として実施する可能性を感じました。

宮城県内水面漁業協同組合連合会

コーディネーター 高山遼輝  
理事 高橋義雄

江合川漁協参事 佐藤 正

大崎市を流れる江合川とその上流部の荒雄川において、「企業研修プログラムの試行」として漁協関係者と流域にある民間企業関係者が参加してヤマメの親魚の放流を実施しました。流域地域住民へ漁協の役割や存在意義を理解してもらう機会であり、かつ県内漁協の抱える課題解決に向けた一方策にすることを目的に実施しました。

長野県漁業協同組合連合会

コーディネーター 藤池俊太

コーディネーターがIT技術者の知識を生かし、ICT遊漁券で得られたデータと各種オープンデータを組合せて遊漁者動向や県内漁場の利用状況を解析・可視化する取組や、釣り場マップの制作、GoogleやLINE WORKS等の既存のサービスを導入・活用して、漁協関係者間での円滑な情報共有ネットワークを構築し、内部体制を強化しました。

栃木県漁業協同組合連合会

コーディネーター 田邊宣久

今年度はドローン監視を行うにあたり、それぞれの目的を実現すべく試行錯誤を繰り返すとともに、流域の警察・消防署、行政機関に趣旨説明を行い、円滑に事業ができるよう協力体制を整えました。

なお、事業報告会の内容は、事業報告会の講演録として冊子にとりまとめ、3月末には各漁連へ発送しました。データやこれまでの取組については、共同で事業を実施している（公社）日本水産資源保護協会のHPで公開しますので、ご活用ください。

第1回種苗対策委員会を開催

1月23日、東京都千代田区の丸石ビルにおいて、標記委員会を開催しました。

委員会では、令和6年度の琵琶湖産河川放流用アユ配付事業の結果報告、7年度の琵琶湖産河川放流用アユ配付事業の方針、放流用種苗の供給体制について協議がなされました。

当日は、種苗対策委員会から・湊屋啓二委員（秋田県・萩原剛委員（山梨県）・八田伸一委員（石川県・佐野昇委員（滋賀河川）のほか、滋賀県から農政水産部水産課の上垣雅史主幹・水産試験場の太田滋規主任専門員、出荷者代表として滋賀県淡水養殖漁業協同組合より木村泰造代表理事組合長、事務局

「企業研修プログラムの試行」として、首都圏や地元企業関係者の参加を得て、県内2漁協で実施しました。

また、若者の漁協活動への参加のきっかけとして「とちぎの川を元気にするには」をテーマに、漁協の抱える諸問題に対し、若者の柔軟な思考での意見出しをしてもらう「やったらいいのに協議会」を開催しました。内水面漁業や漁協についての勉強会から始まり、ワークショップを通じた漁協関係者と意見交換を経て、3回目には参加した学生諸氏より意見・提言をいただきました。

和歌山県内水面漁業協同組合連合会

コーディネーター 佐古 充

従来から和歌山県内水面漁連が企画運営していた「わかやま友釣り塾」を中核として、遊漁者人口の増加を目的とした取組を行いました。友釣り塾は今年も活況を呈し、多くの新アユ釣り師を輩出することができました。塾生の一部は企業研修プログラムで実施した、アユの人工産卵場である紀ノ川大堰人工河川式魚道の清掃にも参加されました。また、遊漁券の解析や、遊漁者に向けたHPでの情報発信も積極的に行い、これらの情報は漁連が主催した漁協役職員研修会でも共有し、関係者、遊漁者、一般人も含めた「みんなでやるぞ」体制の醸成に前進しています。

から中奥龍也専務理事他2名が出席しました。

皆川雄二委員長（新潟県）が理事辞職したことに伴い、八田委員を委員長に選出し、議事を進行了しました。全内事務局からは、6年度の琵琶湖産河川放流用アユ配付事業結果の概略を報告しました。

滋賀県農政水産部水産課からは、琵琶湖の資源状況について報告がありました。昨年の12月分の累積漁獲量は注文量の半分以上となり1月も漁を継続することとした。これは河川の水温が、産卵時期の秋に産卵適水温まで下がらなかったため、特に12月の漁獲に貢献する9月中旬以前の産卵数が少なかったと推測している。なお、今後の資源量は注視が必要であるものの、産卵用人工河川の運用は順調に推移し例年より多い52・1億尾の仔魚が琵琶湖に流下していることや、10月生まれのアユは昨シーズンより多く確認されていることから、順調に推移すれば春からの漁獲は昨シーズンを上回ることが期待できるのではないかとのことでした。

令和7年度の琵琶湖産河川放流用アユの標準価格については、供給元の滋賀県淡水養殖漁業協同組合より令和6年度と同額での提案があり、承認されま

三重県内水面漁業協同組合連合会

コーディネーター 齊藤宏和  
新海佑太

漁協の抱える共通の問題として、ヒト、モノ、カネの問題があります。三重県内漁連ではこれらの解決のため、コーディネーターの設置と理事会下部組織として小委員会を設置して「みんなで作る」組織作りを図りました。また、ゾーニングの推進として、鮎ルアーに注目し、県内全漁協と鮎ルアー導入に関する相談会を開催して、導入済みの漁協のほか、準備段階の漁協も多数あることがわかりました。また、釣り人増加を目的に、「わかやま友釣り塾」に習い「三重鮎ルアー塾」を開催しました。さらに、情報発信を強化するためSNSを開設し、写真・動画を積極的に投稿・配信するとともに、フィッシングショー大阪において、三重での鮎ルアーを大々的に宣伝し、鮎ルアーによる新規遊漁者獲得・県内河川遊漁者の増加を働きかけました。

山形県内水面漁業協同組合連合会

コーディネーター・参事 桂 和彦

山形県内漁連は3つの課題について取り組みました。《組合員賦課金等徴収の負担軽減》では、従来、漁協の総代等が対面で徴収していた賦課金等を、電子決済に切り替えて省力化を図るこ

近年、琵琶湖における稚鮎の採捕状況が不安定であり、令和6年の12月の漁獲が少ないことから特に4月から5月初旬までの早期放流分購入の漁協においては、納品時期等について生産業者との連絡を密に行うことが必要となります。引き続き、皆様の増殖活動に大きな影響を及ぼすことの無いよう、供給側と連絡を密にし、配布事業を進めて参ります。何卒ご理解いただきますようお願いいたします。

また、種苗を購入する漁協におかれましては、特に冷水病等の防疫対策について十分確認するとともに、生産者から必ず来歴カードを受け取って、各都道府県の水産試験研究機関に提出していただくようお願いいたします。

表 令和7年度 琵琶湖産河川放流用アユ種苗標準価格

月・期間		1kg当たり税込み単価 円（魚価）	
3月下旬		4,730 円	（4,300 円）
4月		4,730 円	（4,300 円）
5月	上旬	4,587 円	（4,170 円）
	下旬	4,235 円	（3,850 円）
6月	上旬	3,795 円	（3,450 円）
6月下旬 7月・8月		3,685 円	（3,350 円）

と。次に《ICT遊漁システムの活用と機能追加により全漁協の情報整理・漁場マップ作成》では、県内全漁協にICT遊漁券が導入され、システムをより活用して漁場運営に生かすため、遊漁券（電子・紙）販売データの解析と、漁連と漁協間の連絡にLINE WORKSを導入し、河川マップ制作や遊漁者向けアンケート案作成等、県内で統一的行う作業の効率化を図りました。以上はICT遊漁券運営企業の協力を受けて実施しました。県独自の取組の《県の魚》「サクラマス」の漁場管理と遊漁振興》では、標識魚放流から効果評価に必要な釣果情報収集に関する方法、手順、対応を整えました。

米代川サクラマス協議会

会長 湊屋啓二

コーディネーター 田中俊生

野宮幸博

近年、秋田県では熊の出没や水難事故が多発しており、安心して釣りを行える状況ではない。そこで、「SKY大作戦」と銘打ち、ドローンを活用した遊漁者の安全確保と環境整備を行う体制を整えました。また、監視業務の負担軽減により持続可能な遊漁環境の構築を目的として、遊漁券購入者の識別管理方法を検討して監視活動にも応用しまし



琵琶湖産鮎®

滋賀県淡水養殖漁業協同組合

所在地 〒520-0801 滋賀県大津市におの浜 4-4-23  
電 話 077-521-4193  
URL http://www.eonet.ne.jp/~shigatansui





# 気になる研究結果

## イワナが増えたっ！ブラウントラウト対策で釣り場づくり

国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産技術研究所 沿岸生態システム部 内水面グループ

宮本 幸太



### 組合員らの悩み

近年、ヨーロッパおよび西アジア原産のブラウントラウト（写真1）が日本の河川に侵入し、もともと生息していたイワナ（アメマスを含む）が食べられ、縄張り争いに負けることで、ブラウントラウトが生息地を占拠してしまう例が日本各地で報告されている。内水面漁業協同組合以下、漁協とする）が管理する川や湖では、釣り券の収入をもとに魚の増殖（放流など）が行われている。私が長年調査している河川でも漁協組合員らによりイワナやヤマメの放流が行われているが、増加するブラウントラウトの影響が心配されていた。もしもブラウントラウトの影響で放流の効果が低くなると、釣り人が支払うお金が無駄になるばかりか、組合員の努力も報われず二重の悲しみを味わうことになる。毎年12月中旬に組合員らと極寒の川で「頼むから増えてくれ」と震えながらイ



写真1. ブラウントラウト

ワナの卵を川底へ放流（写真2）してきた著者にとって「ブラウントラウトがいる川にイワナを放流するとどうなるのか？」は、まさに切実な問題であった。そこで著者は漁協組合員や釣り人らと協力して、この疑問を解決すべくブラウントラウトが数多く生息する河川区域にイワナ稚魚を放流し、約1年後の生き残りを調査した（写真3）。



写真2. 真冬の川で卵放流

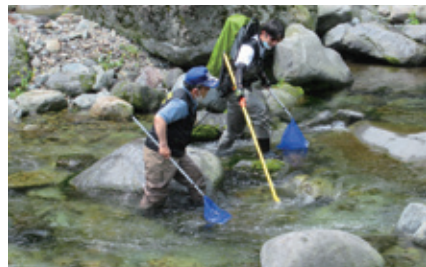


写真3. 魚類の捕獲調査の様子

### 放流イワナは生き残れない？

調査の結果、約1年後まで生き残ったイワナはほとんど確認されず、0個体の場合すらあった。しかし、この結果だけではブラウントラウトが原因なのかはわからない。なぜならば、放流イワナは生まれてからずっと

流時に7cm程度であったイワナたちの平均全長は、1年後に15cm（栃木県では持ち帰りが可能となる体長）を超えていた。そればかりか、15cm以上の魚の数は除去前のブラウントラウトより除去後のイワナのほうが多く、釣りの対象魚を増やす面でも除去は有効であった。これらの結果から、ブラウントラウトがイワナの放流効果を低下させること、除去（ブラウントラウト）+放流（イワナ）によりイワナ釣り場を復元できると考えられた。



写真4. 立派に育ったイワナたち

### ブラウントラウト対策のコツ

一般的に除去により魚の数が減ると、生き残ったり、新しく加入（他の場所から移動、または卵から生まれるなど）した外来魚は、豊富な餌や空間を独り占めできるため、稚魚の生き残りが良くなったり、雌が大きく成長して沢山の卵を生むことで個体数を元の状態に戻そうとする。これによって外来魚駆除では思うような成果が得られない場合が多く、世界中で実施される取り組みのうち、約半数近くが失敗に終わったとの報告もある。本実験でイワナ釣り場を復活できたのは、①区域内で何度も除去作業を繰り返したことでブラウントラ

ウトの捕り残しをできる限り少なくできたこと、②放流イワナたちが除去後すぐに餌や空間を利用したことで、生き残ったり新しく加入したブラウントラウトの餌や空間の利用を抑えることができたこと、これら二点が重要であったと考える。魚を除去すれば問題解決！と簡単に考えてしまうが、繰り返しの除去作業や放流といった極めて地味で時間のかかるアフターケアがイワナ釣り場の復活へと導いたと筆者は考える。

今回は外来魚ブラウントラウトについて注目したが、たとえ在来種であっても野生の渓流魚（イワナやヤマメ・アマゴ）が生息する区域に同種の魚を放流すると同じことが起こりうる。この場合、魚の種類は変わらないので一見すると魚たちに何ら変化は無いように見える。しかし、同種内でも餌や空間の奪い合いが生じるため、魚の生き残りが悪くなり非効率的な放流を招く恐れがある。一方、釣りによって沢山の魚が持ち帰られてしまう川では、放流を行わなければ釣り場として成立しない場合もある。

### 釣り場づくりを考える

これらの結果から、筆者は釣り場づくりで最も大切なことは「川と魚の状況を把握すること」と考える。川の状態を把握するためには、様々な方法があるが、定められた日数を水産物の採捕に費やしている漁協組合員であれば、数名が集まり釣果を記録するだけで、川の状態を把握するための釣獲日誌が作れるのではないだろうか。私の知る限り、漁協組合員には、釣りの腕や経験が「達人レベル」の方々が多く所属している。そういった達人たちが協力すれば、研究者が驚くほど精度の高い記録を残すことが可能だろう。実際、私が調査する河川では、5名の地元釣り人や組合員らが協力して作成した釣獲日誌の結果が、釣り人への聞き取り調査

人間が管理する池の中で敵に襲われることなく、決まった時間になれば沢山の餌をもらえる環境でぐくぐくと育てられている。このため、川に放たれても自然の餌をうまく食べられなかったり、鳥等の外敵に狙われるなど、自然環境に適応できず死んでしまった可能性がある。イワナが生き残れなかった原因がブラウントラウトであることを証明するためには、ブラウントラウトであることを証明するためには、ブラウントラウトがいない（少ない）環境で放流イワナたちがしっかりと生き残れることを確かめなければならない。そのため次は、同区域に生息していたブラウントラウトを除去して、前回と同数のイワナ稚魚を放流した。

### イワナ釣り場の復活！

除去と放流から1年後、同区域では120個体以上もの立派に育ったイワナ放流魚たち（写真4）が確認され、放流の効果が10倍以上に跳ね上がった。イワナを捕獲するたびに「ヤッター！」「よっしゃあ！」と歓声をあげてイワナとの再会を喜ぶ調査員たちの笑顔は今でも忘れられない。しかも調査区域に生息する全ての魚の総数や総重量をみると、ブラウントラウトを除去したにもかかわらず、除去前と比べて大きな変化は認められなかった。これは、ブラウントラウトの除去によって未利用となった空間や餌を放流イワナたちが有効に利用し、成長と生き残りが高まったためと考えられる。放

（350名程度）の結果と同様の傾向を示すことがわかり、ブラウントラウトの分布状況を調査する際にもこのデータが大活躍している。協力者の釣り人からは「好きな釣りをして釣り場管理に役立つなら本望」と嬉しい言葉をいただいている。釣獲日誌の作成方法や成果については、無料で見ることのできる水産庁パンフレット「いつも魚にあえる川づくり」をご覧ください（写真5）。長年培ったあなたの釣りの腕や経験によって得られた貴重な釣果が、単なる「昔話」や「自慢話」として片づけられるのは非常に勿体ない。記録することで未来の釣り場づくりに役立ち、過去の川を知るための財産として後世へと引き継がれていくことに期待したい。



写真5. いつも魚にあえる川づくり  
QRコード（閲覧・ダウンロード可能です）

本稿で説明したブラウントラウト研究の詳細については以下の論文を参照ください。Miyamoto, K., Fukuda, K., & Michita, Y. (2024). Evaluating the effectiveness of non-native brown trout suppression to improve native white-spotted charr stocking. Ichthyological Research 71, 522-528.